

塩山蒔絵硯箱

京都国立博物館蔵

縦 二五・六釐 横 二三・五釐
高 四・二釐

〔図版十二〕

この硯箱は昭和三八年、文化庁からの管理換により本館蔵となったもので、土屋子爵家伝来として古来有名なものである。

この小文は硯箱の形状・意匠・技法、等を改めて詳細にみながら、その構造上の疑問点を示し、考察を加えてみたいと思うものである。

形状は方形、蓋表四辺と身底四辺を面取した被蓋造りで、見込部には左方下部岩座に硯を納め、その右方に二本の棧を付し、筆架式としている。また岩形銀製の水滴が付属しているが、他の筆・刀子・錐・墨柄などの納入品は欠失している。

箱総体に黒漆を塗り、蓋表(図1)は波に洲浜、そこに点在する奇岩と、空を飛び洲浜に遊ぶ千鳥を配した意匠で、技法的には空を金梨地に――岩と千鳥の頭、胴、羽の部分に金高蒔絵とし、波・洲浜は金平蒔絵と銀切金、描割を施し、岩には部分的に銀粉を蒔いている。また千鳥の目・羽・足は金の付描で表わし、千鳥の一部には銀金貝で装飾し変化をつけている。蓋表四辺の面取部は沃懸地にし、牡丹唐草を金平蒔絵で施している。さらにこの意匠中、奇岩に「志本能 山 散 新 亭」の七文字が銀象嵌で散らされている。

蓋裏(図2)も同意匠、同技法であるが岩はやや低い高肉蒔絵と

し、やはり岩中に散らされた文字も平たい銀金貝にし、波は研出蒔絵で表わしている。文字は次の通りである。「君 加 見 代 遠 盤」また、蓋側面の内側は梨地無文である。

見込部(図3)の硯を嵌めた岩座と筆架の棧は梨地と沃懸地にし、岩座の所々に苔を表わす平蒔絵が施される。底部一面はさかまく波を連続的に金平蒔絵で描き、身側面内側は梨地、硯の下面のみは梨地(図4)にしている。

蓋側面(図5・8)は四辺とも梨地に千鳥を配し、身側面は蓋裏と同技法で洲浜・波・岩と千鳥を意匠し、岩中に「八 千 世 登 會」の文字を散らしている。蓋・身とも縁は沃懸地で、身底部の面取部、底部(図9)は梨地無文である。

この意匠はいまさら書くまでもなく、図柄と文字から『古今和歌集』巻第七 賀哥

しほの山さしでのいそにすむ千鳥 きみがみよをばやちよとぞな

く
を表わしたものである。文字で、しほの山さしで きみがみよをばやちよとぞを、また図柄で、いそにすむ千鳥 なくを表現している。この塩山の所在には諸説があるようだが、『大日本地名辞典

中巻』の甲斐 東山梨郡 於會郷に塩山「山下に塩類泉出づ温六十四度。○国志言、塩山は於會郷にありて、鹵塩を産する地なり、因て名づく、古へよりしほの山又エンザンとも言、乾隅に小塩山、塩川と言もあり、本州の名区なり、古今集を始め、和歌諸什に往々雑見せり(略)塩山は海磯に非ざれども「しほのさしでのいそ」と縁語に潮の満干を言掛け、月にも雪にも詠み合する事、古今の例なり。」とあり、山梨県の笛吹川岸の塩山とみてよいのであろう。

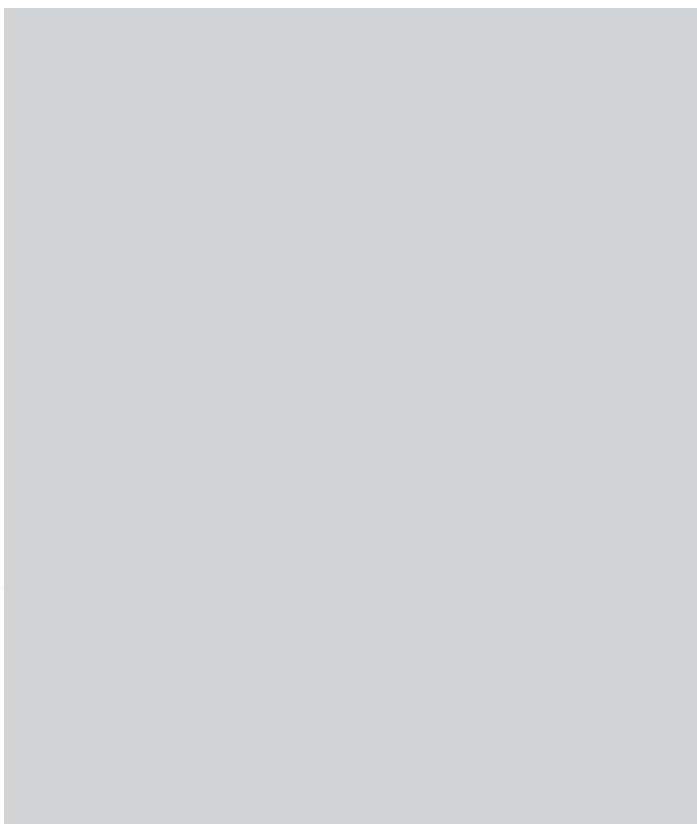
さて、この硯箱はその意匠、漆工技法、形態からみて、室町時代、十五世紀の作品であり、いわゆる東山時代の歌絵の硯箱である。『幸阿弥家伝書』によれば、元祖道長伝に「此作大方能阿彌土佐光信下絵ヲ用ル土佐下絵之道具ハ大方高蔭絵能阿彌相阿彌下絵之道具大方研出シ蔭絵也併是ニ不可限」とあり、あるいはこの奇岩と千鳥・波を配した意匠は土佐派の画家の下絵になるものかもしれない。また、この時代この塩山の意匠は好まれたようで、東京国立博物館に「君加」の文字を配した硯箱、「しほのさしてのいそ君之」の文字を扇面に散した手箱が所蔵されている。その他、同時代作と思われる硯箱、文台、手箱に千鳥をあつかったものはいくつか現存し、千鳥も非常に好まれたことがわかる。千鳥は平安時代から現在まで美術工芸品、特に漆工芸品に好まれて使われたモチーフであり、この千鳥の変遷というものについては興味をそえられるものがある。ここではこの小さな硯箱中に一四三羽もの千鳥が描き込まれていることだけ記しておく。

さて、冒頭に書いた構造上の疑問点について記してみたい。このことは以前から問題視されていたことであるが、論及されていないことから試考してみたい。それは見込部の構造が同時代の類品の硯箱と異っていることである。この時代の硯箱の見込部は、ほとんど中央の下水板^{ゲスイタ}に水滴と硯を嵌込み、その左右に懸子を納めたものがあり、あるいは見込の左方に下水板を敷き、水滴・硯を入れ右方に懸子を納める構造になっている(挿図1・2・3)。しかし、この塩山の硯箱は左方下の岩座に硯を納め、その岩座から棧を二本右方にのぼした筆架形式の構造となっており、箱に付属する岩形の水滴(図11)

は単独で安置する位置が定まっていらない。結論を先に述べると、ある時期、この硯箱は大々的に修理され、見込部は大改造されたのではないかということである。これを考察する切掛になったのは硯底部にある次の刻銘(図10)である。

「天下一 中村石見守(花押)」

この中村石見を名告る硯師は『宝暦大成武鑑』の「御硯師南伝馬町一丁目中村石見」、「大武鑑」明和四年の「御硯師 中村石見」を初見に安永二年、寛政三年、文化六年、文政六年、天保四年、同十四年と幕末まで続いている。これらの武鑑には御硯師はこの中村石見一人しか記入されておらず、天下一の銘もうなずける。ただ、宝

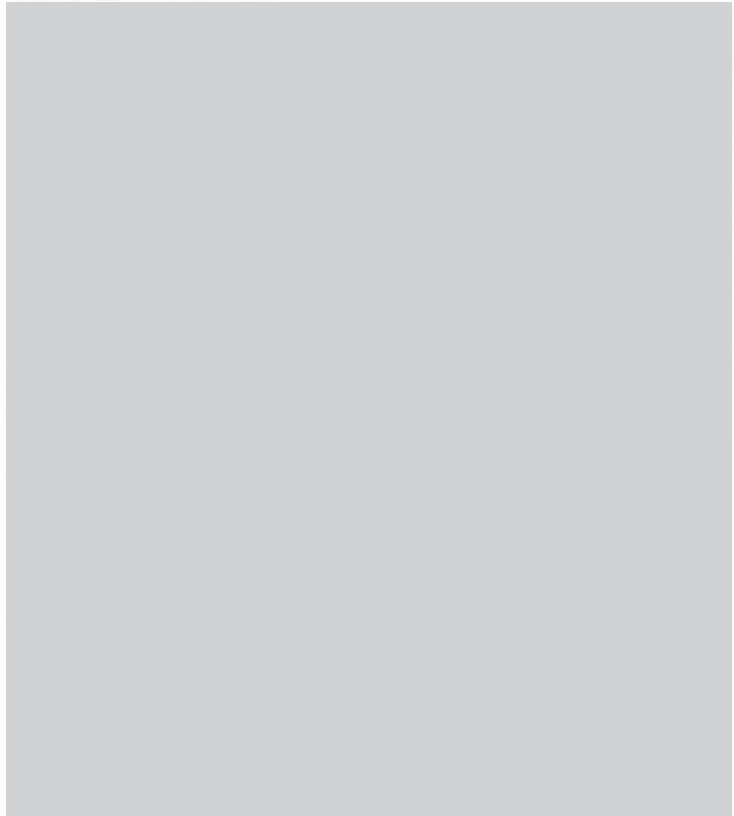


挿図1 重文 春日山蔭絵硯箱 根津美術館蔵

暦年間以前の武鑑や他の資料にその名が捜せない現在、上限を宝暦間におかざるを得ず、この硯がこの硯箱に納められた時期と考えられる。ということは、以前に納められていた硯が何らかの理由で欠失し、この硯が新調代用されたものであろう。

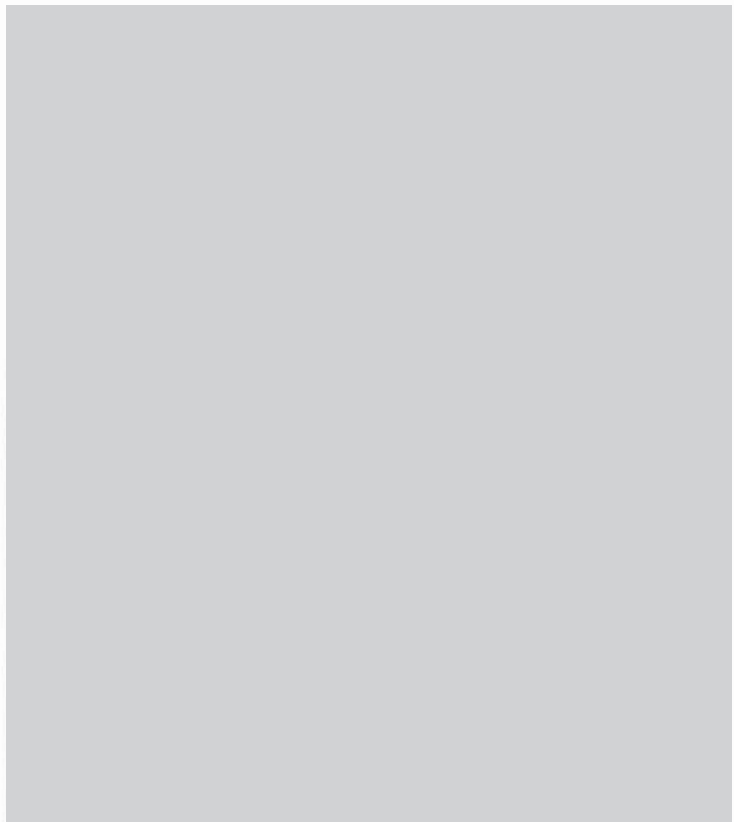
またこの硯を納めるために、大きく見込部を改造した跡がみうけられるのである。

即ち、現状の構造はこの時点で改造されたもので、以前は他の同時代の硯箱と同様、下水板に水滴と硯が嵌込まれ、懸子が納められていたと推測されるのである。というのは、硯の下の見込部は黒漆塗に梨地が施こされており(図11)、この梨地は蓋表・蓋裏・側面の



挿図2 重文 嵯峨山蒔絵硯箱 根津美術館蔵

それと粗・密の違いはあるものの同じ金粉の調子である(図12・13)。また、岩座の梨地は(図14)蓋表や蓋裏のそれとは異なる。また、これは非常にうまい高度な蒔絵技法で見込部一面に蓋表・蓋裏の波文に似せて描いているが、詳細にこれらを比較すると、同じ平蒔絵ながら筆づかい、金粉粒子の粗密さ、光沢に差異が認められる。波文の全体の構成、波のうねりの線、飛沫^{しぶき}の表現、あるいは箱隅の波の処理(図15・20)に大きな相違がある。蓋表に比べ身込部を多少簡略に蒔絵していると考えても、同時期の蒔絵技法とはとても考えられないものである。硯下の梨地のみを残して見込部ほとんどを造り改え、蒔絵仕直したと考えるほうが妥当のようである。



挿図3 千歳蒔絵硯箱 藤田美術館蔵

当初の見込部は黒漆に梨地で水滴、硯を嵌め込んだ下水板を置き、千鳥など塩山に關した蒔絵を施した懸子が納められていたと同時代の類品から推測される。硯懸子、下水板の欠損により、筆架式の構造に造り改えられたものであろうか。そのように考えると、水滴のみが当初の納置品として遺されたともいえる。

蓋表・蓋裏の亀裂の修理と剝落部分の蒔絵の補填もこの時のものである。(昭和四四年北村大通氏により修理が行われているが、これは亀裂部を漆を注入して補強したもので、蒔絵部分にはほとんど手を入れていない)。

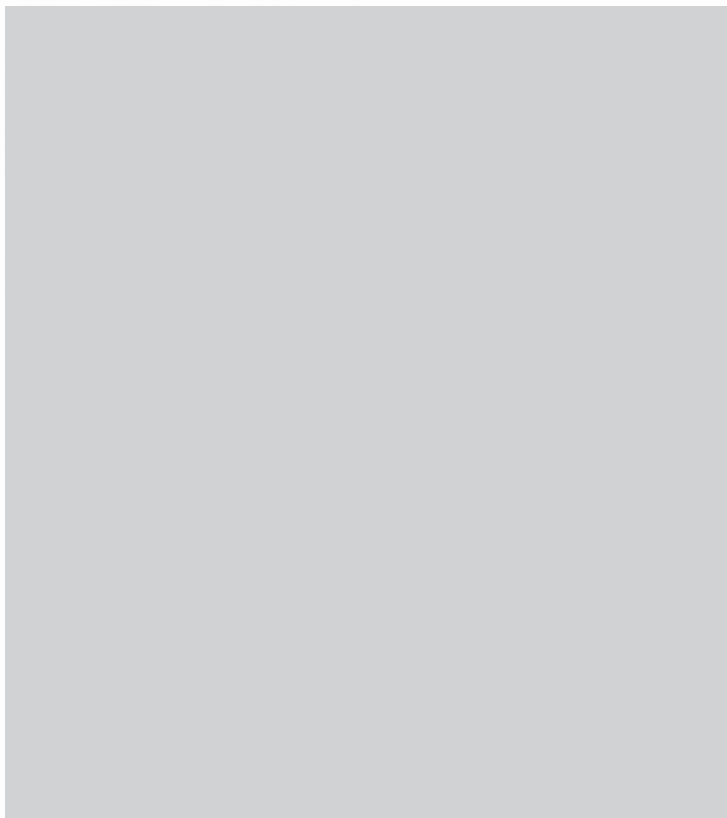
江戸時代中葉、この硯箱の見込部に構造上の改造の手が加えられ

たと推測するものである。

最後にこの硯箱の付属品、箱などについて触れておきたい。箱内に白絹綿入りの中込みを入れ、箱は卅入菱繋地丸龍宝尽し文段子と紋入菱格子繋金入縹珍の二裂からなる袋に納り、「塩乃山」と金蒔絵された桐白木棧蓋造の内箱、桐春慶塗印籠蓋造の「塩山 匣箱」と黒漆銘のある中箱、桐白木印籠蓋造の「塩山蒔絵硯筥」と書かれた三重箱に納められている。なお、外箱に「子爵土屋尹直所蔵」中箱には「土屋正直所蔵 漆壺」の墨書の貼紙がある。時代からみて袋・内箱・中箱はこの修理の際に新調したものではないかと考えられる。

なお、蛇足ながらこの硯箱が時代を通して珍重されたことの一つに、江戸時代の作と思われる模造——昭和十一年八月十五日発行マリア画房刊「蒔絵百選」所収西村吉之助氏蔵——(挿図4)が造られていることでも窺いしられるところである。

(灰野昭郎)



挿図 4



图2 盖裏

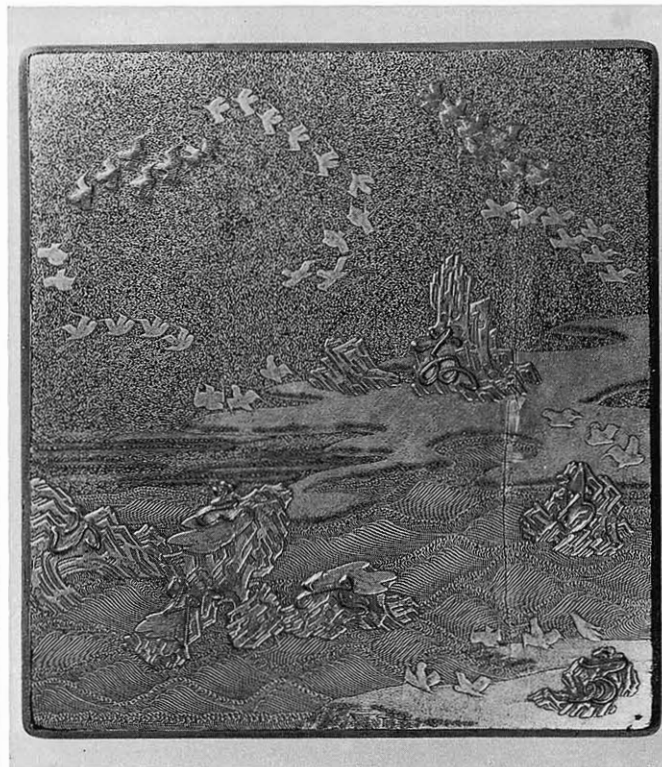


图1 盖表

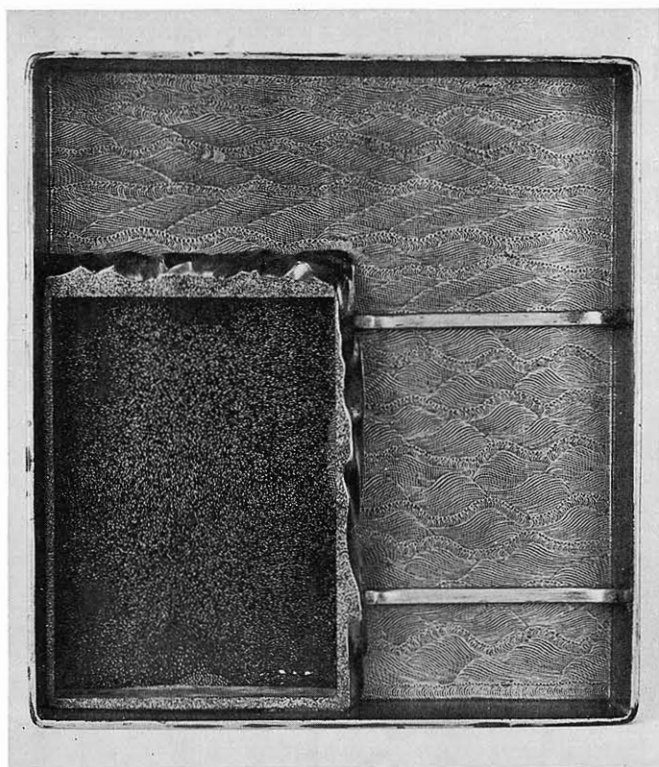


图4 同 (徐硯)



图3 見込

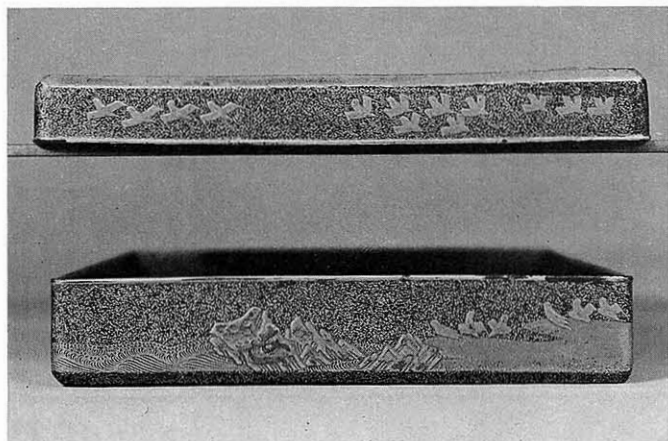


图6 同

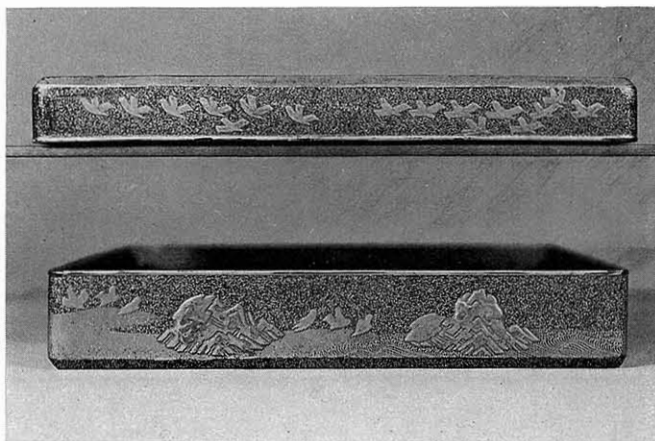


图5 盖身侧面

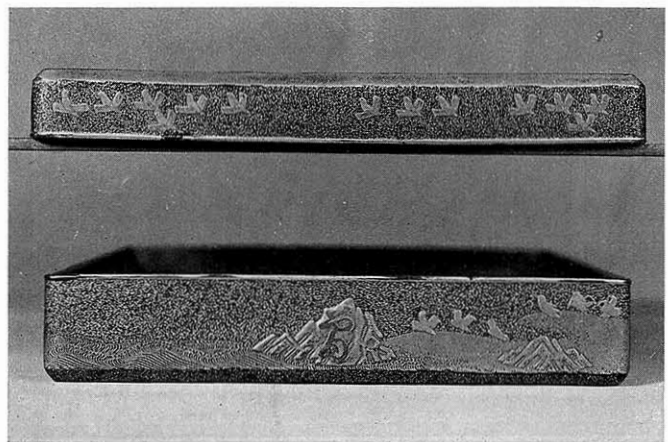


图8 同

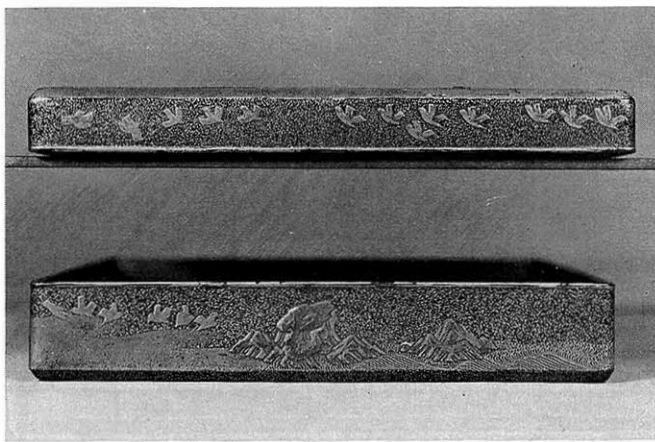


图7 同



图11 水滴



图10 砚底铭

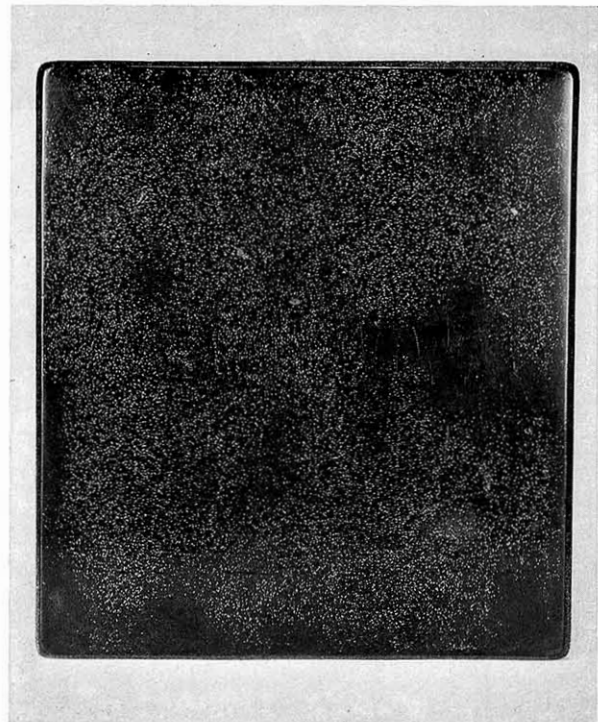


图9 身底

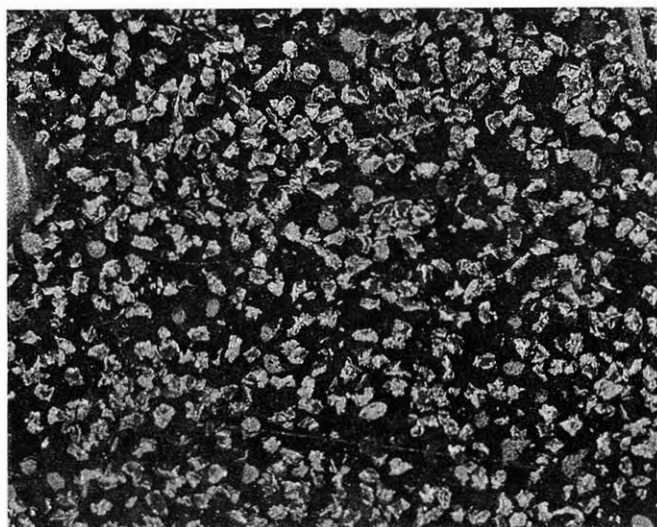


图12 蓋表梨地 (同倍)

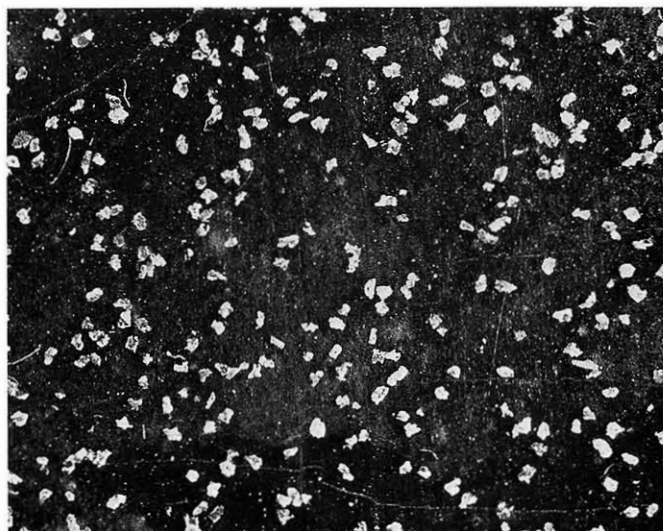


图11 身込梨地 (5.5/1倍)

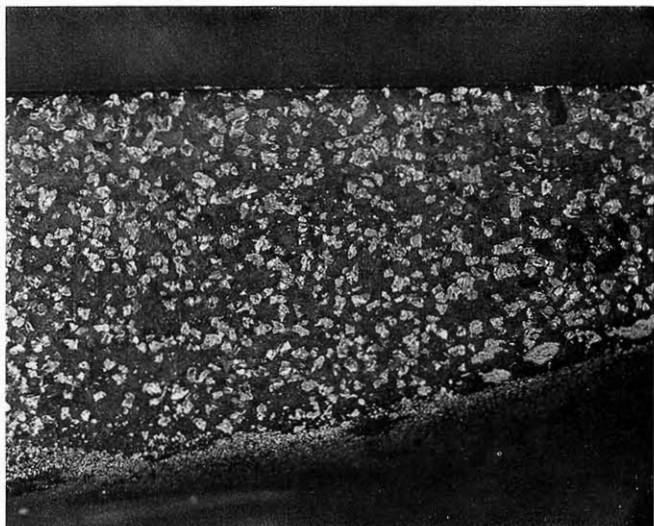


图14 岩座梨地 (同倍)

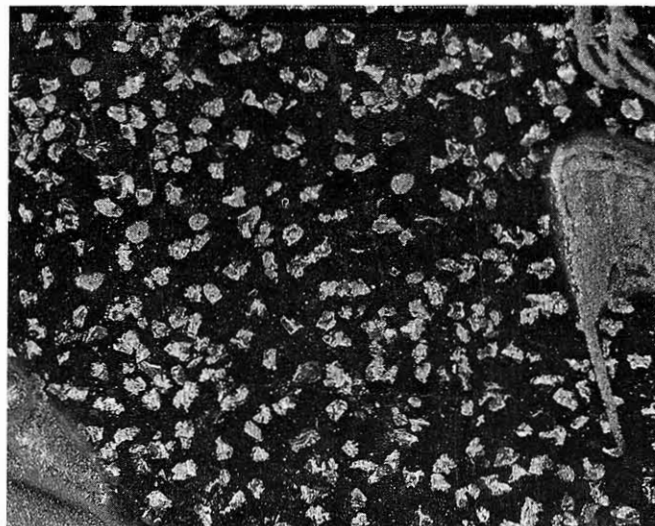


图13 蓋裏梨地 (同倍)

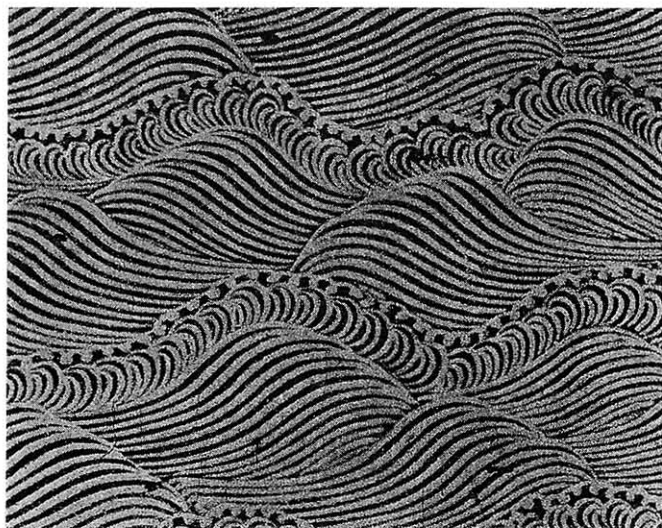


图16 見込波文 (同倍)



图15 蓋表波文 (2/1倍)

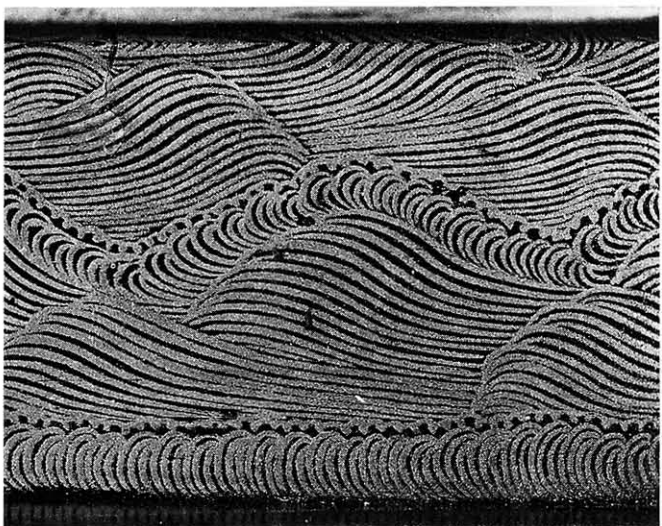


图18 見込下部波文 (同倍)

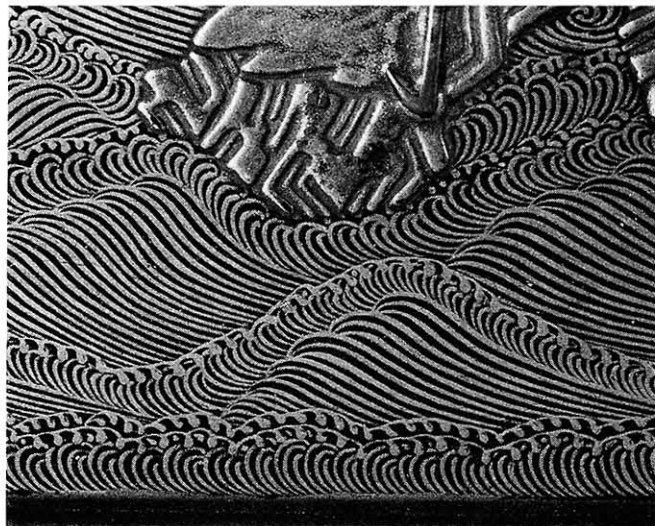


图17 蓋表下部波文 (同倍)



图20 見込波 (同倍)

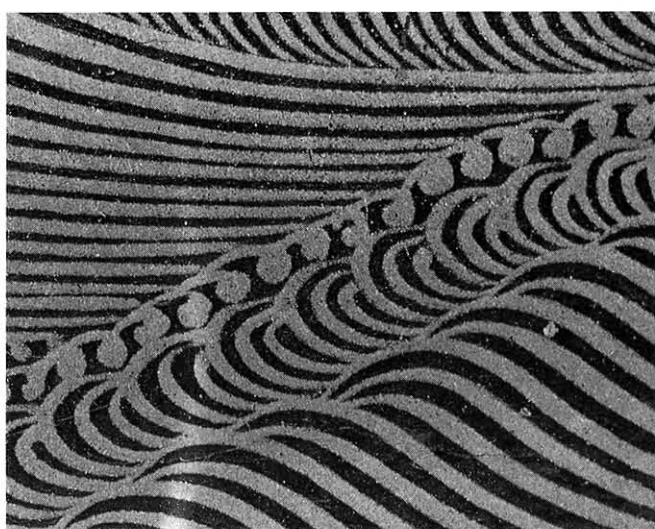


图19 蓋表波 (5.5/1倍)